

「障害のある」子どもと「ない」子どもが共に過ごすとは

保育・教育の場で保育実践する社会人保育者1年目の語りから

○鈴木晴子 潮谷恵美 山田陽子 権明愛

(十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科)

KEY WORDS: インクルーシブ保育 共に過ごす意味 新人保育者の現状

(目的) 幼稚園・保育所・認定こども園は、子どもにとって家庭から離れて初めて過ごす集団生活の場であり、同年齢や異年齢の子ども同士のかかわりあう場で過ごすことは子どもにとって大切な育ちの場である。この現場には、児童福祉法で言う「すべての子ども」が本来過ごす場であり、インクルーシブ保育への転換が図られようとしている。保育者は人的環境であり、専門性の向上はこの方向転換に欠かせない事項である。では、実際の現場は、この転換をどのように進んでいくのだろうか。山本・山根(2006)は現職者の障害のある子どもの保育に対するニーズ調査を行い、現状と課題を提示し、田中・渡辺(2017)は試行的に実施した保育者研修の効果を報告している。本研究では、その検証の手掛かりとして、「障害のある子ども」と「ない子ども」という言葉をあえて用いて、共に過ごす意味を社会人1年目の保育者がどのように捉えているのかを明らかにし、保育者1年目の現状と課題を明らかにし、専門性向上システムの構築につなげていきたい。

(方法) 1. 対象者: 本研究は、2013年度の質問紙調査の研究対象者のうち、追跡研究に協力の了承を得たJ大学卒業生8名のうち6名である。いずれの学生も大学入学前・後に障害のある子どもや大人との出会いやかかわり経験がある。対象者は保育所あるいは幼稚園で保育者として勤務し、研究協力当時は社会人1年目であり、担任保育者である。2. 研究方法と実施時期: 2017年2・3月に1名当たり60分程度のインタビュー調査を実施した。尚、インタビューは筆者である。3. インタビュー内容: 2016年に実施した項目を改訂し、項目0: 就労状況、項目I: 社会人1年目での障害のある子どもや大人との出会いの実態、項目II: 障害児保育と教育に関する意識の変容、項目III: 障害観の変容、項目IV: 障害のある子どもの保育に携わるイメージの5項目をたて、半構造化面接で実施した。4. 手続き: インタビューガイドに沿って実施、ICレコーダーで録音し、逐語を起した。本研究では、項目II: 障害児保育と教育に関する意識の変容のうちの『質問2: 保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる場合、誰にとって意味があると思うか。』に対する語りの内容を検討する。5. 倫理的配慮: J大学研究倫理委員会の承認を得た。対象者に対する口頭説明も行ない、研究発表に対する了承を得た。

(結果) 対象者には5つの選択肢を与え、その回答理由を問うた(下表)。5名が選択肢(3) 障害のある子どもと障害のない子どもの両方の子どもにとって、共に過ごすことは意味があると回答し、1名(Cさん)が選択肢(1) 障害のある子どもにとって意味があると回答した。Bは障害のない子どもが障害のある子どもと共に過ごす中でかかわりを持つことの難しさ、C・F・Gは障害のある子ども自身に合わせたかかわりをとっていく子どもの姿を語った。Dは障害のある子どもが障害のある子ども、ない子どもの両方とかかわる意味、その保護者も障害のある子どもをもつ保護者と接点をとる意味があるだろうと述べている。Cは障害のある子どもにとって保育・教育の場に集う子どもと関わることが発達支援としての意味をもつと語った。また、A・B・D・Gは大人になる前に子どもの頃に障害のある子

もと出会うほうが良いだろうと述べている。

表「障害のある」子どもと「ない」子どもが共に過ごす意味

学生	語りの内容
A	障害のある、ないに関係なく、言葉やそれ以外の方法でのコミュニケーションや表現の仕方を知り、理解しあうことは、双方にとても意味がある。色々な人に出会うことにも価値がある。社会人になって、子どもの頃に出会う意味があると思うようになった。
B	障害のある子どももない子ども、社会で一緒に生きているということを少しでも身につけることが大切だ。現場で保育実践し、改めて障害のない子どもがある子どもを理解する難しさとその理解を育むかかわりの難しさを体験した。これまでと変わらないのだが、子どもの頃に出会う意味があると思う。
C	在学時と考えが変わった(以前は3番を選択)。以前は、特別にみており、自分たちの関わり方を学びがあると思っていたが、実際に保育実践に携わり、障害のない子どもは障害のある子どもを特別には見ていないと感じた。障害のある子どもの行動に対して、「いつものことで、それが普通」と子どもは思っているという他の保育者からの言葉で、そう思うようになった。今は、障害のある子どもがない子どもに刺激を受け発達が促されるだろうと思うと、そこに意味があると思う。
D	障害のある子どもにとっては類似する障害をもつ子どもとかかわることにも意味があるだろうし、障害のない子どもと関わることで幅が広がると思う。また、違った環境と関わることにも意味があると思う。保護者にも同様の意味を持つだろう。障害のない子どもにとっては、価値観の違いを知ることになるだろう。ノーマライゼーションというか、当たり前になるようになっていったらよいと思う。子どもの頃に出会う意味がある。
F	障害のある子どもをクラス担任として受け持ち、子どもがとても成長したと感じている。障害のない子どもも、相手を思いやるかかわり方が増え、成長を感じた。私自身ももっと知識をもっていたら、色々な体験ができるだろうと思っている。
G	障害のない子どもがある子どもと関わっている様子を見ると、徐々に障害のある子どもに伝わる方法で伝えるようになっていく変化をみた。この変化を目の当たりにして、いいなと思った。大人になってからではこういったことは難しいと思うので、子どもの頃に出会う意味があると思う。

(考察) 保育実践の中で、子どもが子どもを知り理解を進めていく事実を目の当たりにし、学生時代に想定していた共に過ごす保育の様子に変化をもたらした。同時にBのように、それを支える難しさに直面していることも明らかとなり、具体的な事象に即した助言指導の必要性が感じられる。こういった保育者自身が抱く困難さの内容を理解した助言指導や研修システムの構築が求められているとも考えられるだろう。

(文献) 山本佳代子・山根正夫(2006) *インクルーシブ保育実践における保育者の専門性に関する一考察-専門的知識と技術の観点から-*; 山口県立大学社会福祉学部紀要, 12, 53-60. 田中尚樹・渡辺頭一郎(2017) 発達障害児とその保護者への支援に関する保育者研修のあり方についての検討-A市の就学前施設の保育者に対する研修事業を通して; 日本福祉大学子ども発達学論集, 9, 47-56.

【付記】 本研究は、十文字学園女子大学プロジェクト研究経費補助金平成28年度助成を受けた。

(SUZUKI Haruko, SHIOTANI Emi, YAMADA Youko, Ming-ai Quan)